

吉野文六大使インタビュー

1997年6月30日

きき手 田中明彦氏

田中 今日吉野文六元大使のお話を伺いたいと思います。主にテーマはサミット・先進国首脳会議の起源、特にランブイエにおける首脳会議ということになると思います。

お話を伺う前提として、私のほうで調べがまだ不十分なんですけど、吉野大使の簡単な、このあたりの経歴を……。60年代の終わりぐらいから、アメリカで駐米公使をなさっていますよね。

吉野 そうです。ぼくは3回アメリカの大使館の勤務したことになっています。まず第1に1949年ごろ、最初にアメリカに赴任しました。2年半ぐらいいて帰ってきて、それからもう1回はハーバードへ1960年、61年に行ったんです。そのときはアメリカ勤務というかたちになっていたんですけども、実際には大使館で仕事はしなかったんです。それからもう1回はちょうどリンドン・ジョンソンのときです。

田中 大統領選挙が68年ですね。

吉野 68年にアメリカ公使になり、それから3年ぐらいいたと思いますが、70年の12月までアメリカにいたわけですよ。

田中 今回はそちらのほうまではあれなんですけど、いずれ機会があったら、日米繊維摩擦のご意見も伺えればとも思うんです。

吉野 それは喜んでやります。

田中 このへんは私がまだちゃんと勉強していませんのであれなんですけど、この間、菊地大使にお話を伺ったのですけれども、日米繊維摩擦については、通常、学会で定説になっているのは『日米繊維紛争』という本があります。これは筑波大学の佐藤英夫とフクイハルヒロ、あとはアメリカ人のI・M・デスラーというのが3人で書いた本なんです。『ザ・テキスタイル・ラングル』という70年代に出た本なんですけど、この間、菊地大使にお話を伺うと、どうもその本の説と菊地大使のお考えはだいぶ違うようです。(笑) そうなると、やはり吉野大使からもお話を伺ってみたいと思うんですが、今日はちょっとそのあたりは。

吉野 その話なら、また……。

田中 そうしますと、1975年に外務審議官になられたということですね。

吉野 そうですね。

田中 これは三木総理がなって、その後ですか。

田中 三木さんは74年の12月に青天のへきれきとかというのでなったんだと思うんです。

吉野 そうだろうと思います。ぼくの前任者はツルミ君かな。何しろ外務審議官になって、主として経済問題についての対外折衝をやれとのことですよ。

田中 ここに書いてあるので言いますと、OECDの大使から外務省に戻られ

て、それで審議官で、その間は何かしばらく……。

吉野 なかったですね。

田中 帰ってきてすぐですか。

吉野 すぐです。

田中 外務審議官になれというので、お戻りになった。

吉野 そういことです。9月ごろでしたか、8月か。

田中 これは月は書いてありませんけれども、通常の役所の人事は割と春先から夏にかけてありますが、この年もそんな感じですか。

吉野 だろうと思いますが、何かぼくが別れを告げ、パリを発ったのは夏、8月のような気がします。9月ごろやりだしたのではないかと思いますが、そのへんはちょっと……。

田中 このナカムラさんの本によりますと、8月に三木さんが日米首脳会談をやっているんですが、ここのところに外務省の6月末にと書いてあるんです。

吉野 ぼくはもうすでに出ていますね。なるほどこのほうが詳しいですね。

じゃあ、このほうが正しいでしょう。

田中 その前の年に戻られたということはありませんか。

吉野 いや、そんなことはないです。おそらく前の年ではなくて、帰ってきてすぐでしょう。8月、これはフォードのときですね。

田中 フォードのときです。

吉野 じゃあ、その前の年ですよ。つまりランブイエのときに、もうぼくは三木さんにお供して行ったわけです。

田中 これはランブイエの前ですね。

吉野 そうですか。

田中 ランブイエの前です。

吉野 ランブイエのときはアメリカではフォードが行ったんですか。

田中 フォードですね。

吉野 ぼくはアメリカの大統領がだれが行ったかは全然印象がないんですよ。

(笑)ただ、その直後の76年6月か何かにサンファンがあったんです。そのときはフォードが来たことは覚えています。それで、あれが新しい大統領だという印象をむしろ受けたんです。そうですか。じゃあ、もうすでにこのときにはフォードになっていたんですね。

田中 フォードになって。

吉野 そうでしたか。フォードになって、すぐですかね。

田中 でも74年にニクソンは辞任したのではないのでしょうか。それで三木さんになって、12月で、外務大臣は宮沢さんですよ。

吉野 そう、宮沢さんなんだ。それで思い出した。そうですね。

田中 このころは外務審議官というのは2人ですか。

吉野 もう2人いたんじゃないですか。

田中 次官は東郷さんですか。

吉野 東郷さんのとき、ぼくがアメリカにいたから、そうですね。東郷さんでしょうね。東郷さんの前には森さんという人がいたんですが、ぼくがアメリカ局長をクビになったときは、森さんなんです。沖縄返還で例のあの事件を起こしましてね。そのときは森さんですね。それでその後には法眼さんになって、法眼さんの後は、東郷さんで、東郷さんの後が。

田中 高島さんはまだ後ですか。

吉野 高島君はもうちょっと後です。有田君というぼくの同期の人が次官になったのですが、そのときにぼくは彼に報告した覚えはないですから、その前の人ですね。

田中 私の記憶だと、三木総理の初めは東郷次官だったと思うんです。

吉野 じゃあ、それでしょう。

田中 前に日中関係を勉強したときに、覇権の問題が起きて。

吉野 ありました。いつまでたっても決着がつかなくて。

田中 三木さんがなったときに日中平和友好条約をやろうとやり始めたら、覇権が問題だというのが75年の初めぐらいだった。それで春ぐらいまでもめて、そこで動かなくなってしまったのがこのころだと思うんです。

吉野 高島君が条約局長のときです。法卑とか何とか言われてね。そのときは次官は東郷さんですか。

田中 ええ。

吉野 東郷さんと高島君と反対したんでしょうね。東郷君というのはそういうプリンシプルの人ですからね。(笑)

田中 それで、いまこのへんの日米首脳会談のところで、三木さんが7月ぐらゐ、夏に準備されていて、これを読むと、ぱらぱらと出てくるんですが、平沢さんという人がいます。

吉野 いました。彼によくブリーフに行ったものです。

田中 それでこのへんでナカムラさんの話を読むと、平沢さんがブレーンと面しているいろいろ出てくるのは困ったことだと外務省の人がおっしゃっているということですけども、こういうことはあったでしょうか。

吉野 外務省の人はそう思ったでしょうね。ぼくは個人的に彼をよく知っていたから、別に気にしなかったけれども、当然、外務省の事務当局、なかには、局長クラスの人でもそういうことを言った人が多かったでしょうね。ぼくは平沢さんとは特別な関係がありましたから、むしろよくブリーフに行って、別に平沢さんが困るという気がしなかったです。

田中 総理のブレーンとして見ると、三木さんの外交問題については、平沢さんというのはかなり特別な人だったんですか。

吉野 しょっちゅう三木さんにいろいろ助言していたと思います。どの程度の確な判断であったかどうかは別として、彼はなかなか人を納得させるような口調で話をしますから。ただ、別に特にシャープな人でもなければ、右にしる左にしるという人でもないんです。

田中 最初の日米首脳会談のときに、このころにランブイエのサミットをやるというので、ちょうどヘルシンキでのC S C E、全欧安保会議が7月30日なんですけれども、この年表によると、ジスカールが主要国の首脳会議で日本の参加を正式に要請したのが8月4日だとなっているんです。この首脳会談というのはもっと前から、こういうことをやろうという情報はあったのですか。

吉野 そういうことは聞かないですね。ただ、このころ、首脳会談で日本が出てこいということになったときに、どちらかと言うと、日本は世界政治問題にはあまり発言権もないし、またオブリゲーションも負いたくない。だから、経済問題だけであるらしいから、行ってもいいじゃないかというような話、そういう気持ちでいたんです。経済問題なら発言もできる。しかし、日本の態度は、うっかりヨーロッパやアメリカに政治問題で介入するような羽目に入らないようにという気持ちでしたね。

そのころ、グアダループで会議が4カ国か5カ国で行われたんです。それはここには出ていませんか。

田中 ここには出ていないですね。

吉野 グアダループで会議には、ランブイエの会議のときも、会議があることは知っていたんですが、日本は自らその会議にも出たいといい出しません。むこうも日本を入れたくもなかったらしいのですが、日本は出ないということをもむろ喜んでいただような感じですね。

田中 このグアダループの会議はランブイエの後ですね。

吉野 後のような気もするし、前のような気もします。どちらかわからない。

田中 それは調べます。

吉野 調べてください。そこで政治や戦略問題を話したんです。それには日本は入っていないから、これはかえってありがたいと思ったようなことがあります。

田中 この先進国サミットに至る前だと、大蔵大臣の会議はかなり頻繁にやっていましたね。

吉野 OECDでG10と、それからG3とか、G3はもうすでにあつたかどうか忘れてしまったのですが、少なくともG10の会議はしょっちゅうあつたし。

田中 それはOECDの大使をやっていたらしゃるころ、かなり面倒を見られたわけですか。

吉野 面倒を見たような気もしますが、OECDの会議のときに大平さんが来たことを覚えています。それで大平さんはぼくに、「もうおれはハシゴを上り詰めたのだから、上に行くより手がない」というようなことを言っていました。

(笑)ところが、ぼくは大平さんが総理になるのは、特に期待していなかったんです。

田中 このへんですか。ここに75年1月12日、これは訪米、アメリカですね。パリへ行かれたのではない。大平蔵相というのは三木内閣の最初のころの話ですか。

吉野 そうでしょうね。最初、三木内閣のころ、彼は大蔵大臣ですか。

田中 大蔵大臣だと思います。

吉野 5カ国蔵相会議があつて、これはワシントンですね。ランブイエは11月ころだったですからね。

田中 前の年にはこの米英西独でパリというのがあります。

吉野 ありますね。

田中 ここにある。4月、5カ国蔵相会議…?…とパリでありますね。このときの話でしょうね。

吉野 そうだと思います。

田中 このころに上り詰めたという話が。

吉野 このころ、総理にいずれはならざるを得ないし、つまり総理を争わざるを得ないという気持ちをぼくにもらしておられたのだと思います。(笑)

田中 でも、このあたりのときには、総理のレベルで首脳会議をやらなければいけないとかという話は、まだあまり聞こえてこなかったですか。

吉野 なかったですね。ただ、一つこれとは別に、例の石油ショックが起きたでしょう。73年でしたか。

田中 73年です。

吉野 73年11月ですか。そうしたら、74年1月ごろから、例のキッシンジャー

が提案して、国際エネルギー機構のようなものを作ったらどうか。それをOECDで結局、オイルダラー還流、このへんでね。それでパリでこの1月に開かれたはずですが。

田中 ここにはあまり出ていませんね。

吉野 結局、OECDの事務局がサポートして、インターナショナル・オイル・アグリーメントというのを作ったわけです。その最初の会合にキッシンジャーが来たわけです。そのときのフランスの外相は、ジョベールでした。いつもキッシンジャーと反対のことを言う男、奥さんはアメリカ人で、なかなか英語もうまいんです。それがキッシンジャーの言うことにいろいろと盾突いて、反対していたわけです。彼は後に日本製のVTRをポアティエまで迂回させ課税するという保護政策をとって日本でも有名になった男です。

田中 そうすると、キッシンジャーがそういうことをやっている。それとフランスがどうもうまくいかないようだ。その過程で通常はサミットについてはディスカールとシュミットが話し合っ、こういうものを作って、そのなかに日本も入れなければいけないということを合意したとなっています。そのへんのところは、提案が出るまではあまり……。

吉野 そうですね。日本から積極的に入れてくれというような話はなかったですね。そういう話があるから、動かなければいけないというような話も聞かなかったですね。

田中 そうですか。

吉野 なぜかという、一つはジスカールとシュミットというのは仲が良く、それからヨーロッパの問題はある程度共通している。殊にオイルショック以後のヨーロッパもアメリカも、日本は割合にうまくいっていたんだと思いますが、インフレが相当大きくなってしまったでしょう。それから、75年にはゼロ成長とかマイナス成長になった。日本も多少の困難はあったが、意外にも、すぐに回復したんです。それから、アメリカはその前に例のニクソン・ショックで、ドルをフローティングした。

それでヨーロッパの連中は非常に不満だったんです。アメリカが基軸通貨であるドルの政策について、あまり他国のことを考慮しない。したがって、それにある程度、掣肘を加えるために、日本を入れて、窮極的にはそれで世界通貨秩序を再建しようじゃないかというような気持ちです。それがジスカールとシュミットの思想です。そういう思想も一部働いたのではないかと思います。

もう一つはもちろんヨーロッパは景気が悪くなっている。今に比べればそんなに失業率は高くはなかったと思いますが、失業も出てきて、いずれにせよ、景気が悪い。成長しない。したがって、それも考えなければいけないということでしょうね。

その上、石油ショックにもめげずに、日本の輸出品が依然ヨーロッパに競争力をもって出てくるので、これは困るなという気持ちも、ヨーロッパの連中にはあったでしょうね。だから、日本も入れて、それも調整していこうというようなことではないですか。ともかくぼくらはランブイエで首脳会議をやるから行こうよと言われたときには、その前にえらく準備したということは覚えていませんね。

田中 そうすると、かなり具体的な話になったのは、三木さんがアメリカに行ったときぐらいですか。

吉野 いくら早くても、そうだろうと思います。

田中 それで三木さんがアメリカに行ったとき、この本によると、三木さんはジスカルが最初に提唱したのに非常に関心を持って、晩さん会のときにフォードさんと秘密に國弘さんだけ連れて会談をやったという話があります。このへんは何か。

吉野 覚えていないですね。

田中 これによると、三木・フォード単独会談というのをやって、外務省はだれも出ていなくて、國弘さんだけがいった。記者団は不満を持っていったら、海部さんと吉野外務審議官があたふたとワシントンホテルのプレスルームに駆け付けてきたとありましたけれども。

吉野 何か三木さんが日本から連れていった新聞記者とえらく関係が悪かったんです。その旗振りをしたのは、NHKの有名な記者なんです。彼は必ず1回はそういうことを起こすと言って、警戒しなければいけないと言われていた人なんです。(笑)それが三木さんと直接対峙し始めまして、ほかの新聞記者はあるものは「やれ、やれ」とけしかけるし、他の人たちは白けきりながら、傍観していた。そこへぼくと海部さんが入って行って、何とかなだめたようなことは覚えています。だから、そういうことがあったんでしょね。そこで出たというんですか。

田中 この後ろあたりに、それで善後策を協議した。「会って何を話したのだ」と言うので。

吉野 「会談を中断し、海部、吉野はブレアハウスに引き返す」。ここに宮沢さんが出てこないですね。宮沢さんが外務大臣として付いていったのですが、宮沢さんがそっぽを向いたんでしょね。宮沢さんがあまり三木さんをよく助けなかったんですよ。(笑)彼のいない留守にやったんですか。そういうことですか。

田中 ただ、結局、報告したのは、こここのところで、会談では。

吉野 「会談の内容はヘルシンキで？米仏独が会った際、？非常に議論を呼んだ。…？…日本の…？…問題になったようだ。？これに対し、慎重に検討すると答えた。…？…のものであった」。こうなんでしょうね。だから、それほど積極的ではなかったんですよ。そうすると宮沢さんはやはりいなかったんですかね。

田中 フォード・三木会談には宮沢さんは付いて行ってないんだと思うんです。2人だけで。

吉野 だから宮沢さんがちょっと不満であったでしょうね。だから、ますます……。(笑)

田中 ここによると、平沢和重氏が後から来たら、それに対して、宮沢さんは「あんたは黙っていなさい」と言ったというようなことが書いてあります。

吉野 おもしろいですね。そこらへんは、ぼくはもう忘れてしまったけれども、おそらく書いてあるとおりでと思います。

田中 この後、いまおっしゃったように、日本として見ると、あまり準備はしていなかったし、どうするかというふうになったときに、どちらかと言うと受け身な人たちだと考えていいわけですか。

吉野 それでむしろ政治問題には外してくれという気持ちです。

田中 その後、ただ、行くということになって、準備をすと言ったときは、どんな準備を。

吉野 あまり準備した覚えはないです。

田中 そうですか。

吉野 というのは、アメリカでもまだこのころはシェルパとかパーソナル・リプレゼンタティブというのがいなかった。だからアメリカも事務当局に対して、こういうことをやろうじゃないかというようなことは、それほど言わなかったんです。むしろ事務当局がお膳立てなんかをいただいたのは、カーターのときになってからです。パーソナル・リプレゼンタティブをしていたヘンリー・オウエンというぼくと親しかった男が、しょっちゅうぼくを呼び出して、その後のサミットの戦略をねったものです。それが最終的にはボンで日本とドイツが機関車になれという話も発展して行った訳です。そのころから P. R. という言葉も出てきたのですね。

田中 あらかじめ準備をしてということですね。

吉野 準備をよくやって、そのころには独のペール（後のドイツ連銀総裁）、仏のドラジェール（後の IMF 総裁）、とかいう連中も出てきて、年に 3、4 回会って準備し、場合によってはステートメントなんかの草稿まで書き出したんです。それがロンドンあたりになると、ボンの前ですけれども、今度は「いや、そんな事務当局から出たきた作文はだめだ」というようなことになってきたんです。しかし、カーターのパーソナル・リプレゼンタティブをやったオーエンあたりが、現在のシェルパの最初でしょうね。

田中 当時の新聞を読むと、8月ぐらいに最初、首脳が会う前に経済問題の権威者のようなものがあらかじめ会って、何かやってみたらよろしいとかという記事がちらっと出ていたことがあるんです。ただ、そんなものは日本にはいないというので。（笑）

吉野 そうでしょうね。ただ、いま言ったように、ヨーロッパの問題は相当深刻だったんです。それから、アメリカもインフレが相当高かったんです。カーターのときにはそれが頂点に達しているわけです。

田中 結局、新聞によると、10月の初め、6日に準備会議をニューヨークだったと思うんですが、開いて、新聞記事には牛場さんと吉田財務官が出たということです。そうすると、だいたいこの2人ぐらいがあらかじめ折衝したと考えてよろしいんですか。

吉野 そうでしょうね。

田中 外務省からは牛場さんで、大蔵省は吉田さん。吉田さんとは割と長いお付き合いでいらっしゃるんですか。

吉野 ぼくは吉田さんと一緒に、グリーンSPANの主催した小会合に出たことを憶えています。その頃グリーンSPANは証券会社の経済顧問だったようです。いずれにせよもっと後のことです。

田中 それで、この後、三木さんはサミットに行くというので、ご本人は非常に張り切られたという。

吉野 張り切っていましたよ。それはもう当然ですね。

田中 それで、何とか日本の目玉と言いましょか、提案をやりたいということで、新聞には三木構想と書いてあったりするんですが、ここに書いてある途上国援助の方針をまとめて、具体的な提案をしたいと思われた。しかしながら、打ち合わせの段階で、大蔵省から困ると言われてだめになってしまったということなんですが、そのへんはご記憶はありますか。

吉野 それはそのとおりで、よくわかりますよ。三木さんは昔から途上国援助に非常に熱心で、殊にその前の話になりますが、ぼくらが東南アジア閣僚会議と

いうことを言い出したときに、彼が喜んでそれをやろうじゃないかということで実現したわけです。それで、第1回の会議に三木さんは出たんでしょ。

それで思い出したのですが、「ゆかたがけ」だとか言いましたが、余りかしこまらず、ざっくばらんに東南アジアの開発問題を論議してみようじゃないか、その結果東南アジア諸国がひとつにまとまってプログラムなりプロジェクトを提案してくるならば、日本は金は出す用意がある。というような筋書で、それがもとになって、東南アジア閣僚会議が3回か4回、開かれたわけでしょう。それからカンボジアとか、ヴェトナムの停戦なんかに積極的にあつたし、殊に参加国に、ベトナムやカンボジアを入れるべきだという話ももちろんあつた。あのころ、アメリカはベトナム援助には、南のほうですから相当熱心だったのだけれども、全体としては、三木さんが東南アジア閣僚会議を大いにもり立てていこうじゃないかという主張の推進役になったわけです。

その後、福田さんがさらに踏襲していった。田中さんの代になったら、今度は逆にインドネシアとタイあたりで、暴動が起きたというところまでいってしまったわけです。

田中 この間、菊地大使に伺ったところでは、このところでおっしゃっているんですが、「三木さんとはにかくサミットの第1回では何か日本でアイデアを出すべきではないかと言って、そのときに経済担当の外務審議官だった吉野文六さんを直接呼んで、自分は日本の経済協力の構想を打ち出したい。構想を作れと提示された。それを菊地大使のところへ行って、5カ年計画で何百億ドルとかというものをとにかく作って持っていった」。ここに、「寒かったので、2人で首相官邸の裏にある私邸でこたつに入って、三木総理にブリーフした」というんですけれども。(笑)

吉野 なるほど彼はよく覚えていますね。(笑) 確かだと思います。

田中 そうですか。そうすると、これは全部……。ただ、これは大蔵省に秘密にしていたけれども、出発の前の日になってというので、前日なのかどうかちょっとよく……。

吉野 前日どうか知りませんが、そうでしょうね。「どうしても打ち合わせ……、宮沢外務大臣……、官邸に集まって、三木さんが実はと言って」。

田中 こんなことはご記憶ありますか。

吉野 いや、ないね。彼はよく覚えていますね。

田中 これは閣議みたいな……? ……答申ですか。

吉野 閣議というのか、非公式な会合でしょうね。われわれが出ている。閣議には出られませんから。

田中 ここに「出発の直前にして、対外経済協力関係閣僚協議会というのを開いた」と言っているんですが、この席のことですか。

吉野 そういふことでしょうか。

田中 そこで審議官からご説明になって、それを大平さんが聞いていて、「それはいったい何だ」ということになったんでしょかね。

吉野 そうですね。なるほど、そういうことですか。いや、それはもう忘れていました。しかし、これはよくあり得ることです。非常にあり得るわけです。

田中 それで、この本によると、この菊地大使のだと、これでだめになってしまった。三木さんがその後、弁護するとか、私はやりたいと言わなかったのだからだめになってしまったということなんです。この本によると、パリに着いてからも、外務省の幹部がこの席で再度、「南北問題に関連して、日本政府としての



具体的提案を持つべきだと発言したのである」と言ったのに対して、大蔵省側の同行幹部は「そんなことを今になって持ち出されても困る」と言ったというんです。こんなところはどうか。

吉野 そういうことはしょっちゅうありました。このころ大蔵省は対外コミットメントにはえらく神経を作っていましたから、これはこのとおりだと思えます。しかし、一方われわれは一生懸命、大蔵省を説得しようとしたんですけれども。

田中 そうすると、この幹部は吉野さんである可能性は。

吉野 それは十分あります。しかし、ぼくは説得しようとした相手の顔を覚えていないというのはおかしい。

このころ、これとまた別に、パリでこれと前後して国際会議があったんです。そのときは、そのあと外務大臣はどなたでしたか。パリの……。

吉野 倉成さん。倉成さんなんかと2回ぐらい、パリへ行って、この国際会議に出たんです。それで日本はやはりそういう問題や、援助の問題があったと思います。もう一つは原子力の問題かな。忘れてしまったな。パリに国際会議場というのがあるでしょう。あそこでやったんです。それはちょっとまた別の話になりますね。

田中 そうですか。そうすると、この件はかなり具体的な提案が出せなかったので、三木さんは心のなかでは不満だったんでしょうね。

吉野 不満だったんでしょうね。もう一つは日本は経済援助に非常に張り切っていますが、違う面ではフランスも、対外援助を重視していました。日本と共同して、アメリカその他あたりという雰囲気ではなかったんです。だから、日本は援助問題1本で、自分の発言権を得たい、発言の場所が得られると思っていたのだけれども、ほかの国はそれほど熱心ではなかったです。むしろ通貨問題とか、マクロ経済の調整とか、インフレ問題とかが彼らの関心事でした。

田中 この当時、さっきの問題、ちょっと前に戻るんですが、大蔵省は何でそんなに嫌がっていたんですか。

吉野 あのころはまだ大蔵省は全然、援助問題には否定的だったんです。一般的に大蔵省は今でも対外援助に金を出すのを嫌う。IMFとかワールドバンクとというような大蔵の息のかかった国際機関に金を出すならまだしも、バイラテラルのやつは極力削りたいという気持ちがあるんです。

その中で吉田太郎一氏のように国際機関につとめていた経験のある人はまだいいほうです。

田中 それは大蔵省のなかでも国際をやっている人と中をやっている人の差だという面もあるんですか。

吉野 そういう面もありますし、それから国際金融局の局長はいつも主計局に押さえられていたんです。結局、力関係から言っても主計局長が断然上ですから、仕方がないんですね。

田中 そうですか。(笑)

吉野 だから、その意味でも国連で対外援助はその国のGNPの0.9%までやらなければいけないといわれても、日本はそのうちの0.2~0.3%位がせいぜいしかできない。少し国際的に振る舞ったほうが、それがまた日本にいずれ還流してくるのだという考え方が出てきたのは最近のことですよ。

田中 そうすると、大蔵省は援助については、賠償が終わったらおしまいだと思っていた。そういうことですか。

吉野　そうです。援助問題に非常に消極的だったです。

田中　ただ、大平さんという人はどうだったんですか。

吉野　大平さん、フィロソフィーとしてはある程度、そういう考え方を理解していたと思います。しかし自ら援助問題を推進しようというタイプではないですね。

田中　そうですか。

吉野　それはしかたないですね。

田中　大平さんという人は、自分のポストというか、大蔵大臣をやっていると、やはり大蔵省のことをちゃんと……。

吉野　リプレゼントしなければいかんと。

田中　リプレゼントするということは、しっかりやるというタイプの方なんですか。

吉野　そうだろうと思います。それからもう一つは、主計局あたりから、しょっちゅう釘を刺されていたのではないかと思います。彼はフィロソフィーとしては、むしろ政治家らしいビジョンを持っていたと思います。

田中　外務大臣が宮沢さんで、大蔵大臣が大平さんで、総理が三木さんでしょう。この3人の関係はどんなことになるんですか。

吉野　宮沢さんと大平さんはお互に相当ライバル意識が強かったようです。両方とも池田さんの秘書官をやっていたのですから。しかし、兩人とも大人ですから、表には出しません。仲は余り良くないようでした。けんかしたようなところは見たことはないです。

田中　そうですか。三木さんに対してはどうなんですか。大平さんは三木さんをばかにしているというところがあったんでしょうか。

吉野　そうだったでしょうね。あれは政治家で理想論みたいなことばかり言っているけれども、実行力はあまりないんだという気持ちでしょうね。大蔵省出身の官僚はみんなそう思っているでしょうね。しかし、三木さんはむしろ政治家というのはそういう官僚を押さえて、自分で政策を作っていかなければいけないという気持ちでしょう。

田中　ランブイエへ行ったときの三木さんの気持ちは。

吉野　一つには、彼はその前に東南アジアの開発閣僚会議で、多少日本の経済力を背景にして各国政治家とつき合った経験もあり、それに若い時カリフォルニアにも留学したこともあって自信もあった。しかしサミットは国際会議のひのき舞台です。彼は本来はそういうものが一番好きなんです。しかし、残念ながら、言葉がわからない。ほかの各国の同僚を見ても、別に彼は人間的には引けを取らないと思っていたんでしょう。しかし、何せ言葉がわからないし、同時通訳を通じてやるとなると、その意味ではそれこそ話題についていけなかったのではないかという気がします。しかし、1回ぐらい自分が何とか言ってやろうというようなことは、思っていたんでしょう。何か言ったんですかね。それは忘れてしまったんですけれども。

田中　当時の同時通訳の設備とか、そういうのはあまりよくなかったんじゃないですか。

吉野　よくなかったですし、殊にフランスですから、それほど整備されていなかった。それをイヤホンを通じて聞いていて、非常にフラストレーションを感じたと思います。話題にもついていけないしね。

田中　その話題についていけないと言ったときの原因は、一つは言葉の問題も

あると思うんですが、あとはどうなんですか。話すテーマ等についても、ちょっと世界が。

吉野 当時の西欧世界と日本とは相当距離がありましたからね。

田中 違うということなんですかね。

吉野 今は相当意識が同じところまで来ていますから、グローバリゼーションとかポードレスとか言って、みんなほとんど同じようなことを考えているし、話題も共通になっている。当時はまだまだそこまで日本の意識、国内の意識はかけ離れていましたから、その意味でも日本語を通じて入ってくる先方の言うことなんていうのは、ちくはくで何を言っているのか訳がわからなかったんじゃないですか。無理ないと思います。

田中 これのなかに、最後のところに、「三木首相は孤独感を深め、当初は『こういう会議に出席してみると、世界が今やテクノクラートの時代だね。世界の指導者がそういう傾向にあり、理想主義よりは現実主義が支配的なんだね』と感想を言った。これを聞いたある外務省幹部は今さら首相がそんなことを言うのを知ってびっくりして、『それはそうですよ。世界の？ 枠はみんなリアリストばかりですよ』と答えた」ということがここにありますが、これは吉野さんですか。(笑)

吉野 わかりませんよ。しかし、こういう気持ちでしょうね。そのとおりですね。それはだれということではなくて、そのとおりだと思います。

田中 しかし、三木さんはそうですが、外務省として見ていると、やはり何となくわが国の政治家はまだちょっとこれでは具合が悪いなという感じが。

吉野 それはあったですよ。

田中 ありましたか。

吉野 あったし、日本はもう経済援助と貿易の問題以外の問題は、あまりしゃべれないなという気持ちですよ。通貨問題だって、日本の通貨問題、つまりドルに対するそれと、世界経済のなかにおけるヨーロッパの通貨問題は、当時はまだ離れていました。日本はつい最近まで 360円をどうしても維持してくれと頑張っていましたし、そこから少しフローティングになっても、なるべく大蔵省がいわゆるダーティフロートというのをやって、通貨を安定しようとしていました。だから、その意味でちょっと違う問題だったですね。

貿易問題だって、日本はいわゆるバイラテラルで対米輸出が多すぎるとか少なすぎるとか、そういうかたちでなら調整するけれど、というような意識ですからね。GATTはあったのですけれども、日本は問題にされるときだけしか反応しないということでした。

田中 外務省にとってみると、こういうバイの交渉、交渉しに行くというのではなくて、ある種の何人か出てくる会議にわがほうの代表を送り出すというのは、この75年ぐらいになっても、まだ結構珍しい話だったと思っていいますか。

吉野 首脳の間はね。それから、ぼくのときなんかは月に2、3回ヨーロッパかアメリカに行かざるを得なかったぐらいに、いろいろ会議があったんです。しかし、それでもそれが初めの頃ですから、ぼくの前の外務審議官はほとんど外へ行かなかったです。だから、その意味でも、ようやくそこらへんから、国際会議づいてきたわけです。それでも出ていけば、日本をディフェンドするか、日本は困るからやめて欲しいとかという態度です。それで今のように積極的でもなければ、イニシアティブを取るなんていうことはないです。

田中 このランブイエが終わって帰ってきて、反省会というか、そういうことを話し合ったご記憶はありますか。あるいは特にフォーマルではないにしても。

吉野 何かランブイエに出た人たちが一緒に集まって、あとで話をしたような思い出はあります。しかし、おそらくそのときの気持ちは大過なくほっとしたという事ではないですか。(笑)無事に帰ってきてよかった。(笑)第1回、2回あたりは……

(テー

プ反転)

吉野 それからロンドン。

田中 ロンドン。

吉野 その次はボンです。ボンは大使としてですけども、そのヘンリー・オーエンというアメリカのP. R. がいて、ぼくが大使であるにもかかわらず、「お前、出てこい」と言って引っ張り出されてきたというようなことなんです。

田中 ヘンリー・オーエン。

吉野 これはなかなか人を使うことがうまい男で。

田中 アメリカのN.A.T.O大使をやっていましたね。

吉野 N.A.T.O大使はやらなかったと思います。

田中 カーターのときの。

吉野 そう。カーターのときのパーソナル・リプレゼンタティブです。

田中 そうすると、これでサンファン、ロンドンというあたりでは、ややあれでしょうか。

吉野 サンファンには相当、日本は準備して行ったし、日本から出ていくお付きも多かった。それから各省がみんな興味を持ちだして、その前にいろいろ討議し、ドキュメントも相当作って持って行きました。経企庁の宮崎進氏だとか、大蔵省の松川道哉氏等も一緒でした。新聞記者との関係もシステムティックにして、たとえばサンファンのときは、サンファンの町からまた一寸離れた有名な避暑ホテルです。そこが安全性がいいということで、借り切って、そこに閉じこもってやったんです。新聞記者とかお付きのうちの半分ぐらいは、サンファンの町のほうに泊まらざるを得なくなった。したがって、会議のあったホテルからサンファンの町へ1日2回か3回、会議の模様を知らせに、ぼくがヘリコプターで記者のブリーフに行ったものです。

田中 サンファンのあたりのときは、三木さんはどうでしたか。

吉野 今度は三木さんは1回出た自信もあるし、それからフランスと違って、アメリカでもあるし、もっと張り切っていたと思います。

田中 ただ、国内的にはロッキード事件のころですよ。

吉野 もう起きていたわけですね。

田中 かえって張り切っているというところもありましたかね。

吉野 そう言えるかもしれませんね。

田中 ですから、時期も11月にやって、明けて6月ですから、割と早いですね。

吉野 1年に2回あったような感じです。

田中 そうですね。そうすると、最初のときと比べると、2回目はかなり準備とか、こちらの態勢とかその他含めて、うまくいったのでしょうか。

吉野 そういう意味では今度は、準備万端というかたちでした。

田中 今度はアメリカのほうで会議の設備とか何かはどうだったんでしょう

か。

吉野 警備も非常に厳重でした。潜水艦で上陸するやつもいるかも知れないということで警備員が10米おきぐらいに海岸にずっと張り付いて、海のほうを見ていたというような有様でした。

田中 ちょっと前に戻りますが、三木さんの場合、さっき東南アジアの閣僚会議の話がありましたが、ランブイエのときとか、サンファンでもそうかも知れませんが、やはりアジアの代表だという意識は非常に強かったですか。

吉野 それはありました。それは三木さんは常にそういう気持ちでいたと思います。それから、アジアのために代弁するとか、そういう意味の意気込みは彼はいつもあったですよ。

それから、当時のASEAN、まだASEANができていたかどうか知りませんが、そのような意識が出てくるきっかけを、三木さん、ないしは日本の東南アジア閣僚会議は作ったと思います。当時東南アジア開発閣僚会議に出てきたタイとかインドネシアとか、その他の東南アジアの国々は、みんなそんなにまだ自信があったわけではないですから、「日本が代弁してくれるのは結構だし、大いにやってくれよ。日本をもり立てますよ」という気持ちでしょうね。だから、彼はそのつもりで、東南アジアについては自信を持って発言したと思います。

田中 その当時の首脳のレベルで言うと、三木さんなどはやはり東南アジアについては、よく知っている。

吉野 それはそうです。そういう意味では、東南ア諸国の首脳よりももっと国際的だったですね。彼らは自分の国のことしか知らないし、しかも自分の国だってまた選挙にどうやって勝つかとか、選挙のない場合もどうやって国内の勢力関係を押さえていくかということで頭が一杯で、あまり関心はなかったですよ。

東南アジアの閣僚会議で、その後、福田さんのときにもぼくは付いていったのですが、日本は三木さんが地ならしをやった後、福田さんが出てきて、日本は1億ドルを東南アジア共通の基金として、共通のプロジェクトに金を出すから、ひとつ考えてみてくれという話で始めたわけです。ところが、こうした提案を福田さんが出しても、それではASEANで固まって一つの案を出そうというところまで行かなかったんです。

例えばタイにはエンジン工場を作ってくれとか、マレーシアはタイヤ工場を作ってくれとかいうよう話ならば、やがて共通の自動車ができるということになる。ところが、私のところはエンジン工場を作ってくれと一国が言い出すと、私のところもエンジン工場だとかたちで、みんな自分が中心になってやるんだという気持ちでした。まだ、ASEANが体制をなしていなかったですね。

田中 福田さんのときに、ぼくは日にちを調べてくるのは忘れてしまったのですが、ASEANに行って、いわゆる福田ドクトリンと称するものを出しましたね。そのときはこの準備作業というか、福田さんのスピーチとか、何を言うかとか、ハート・トゥ・ハートとか、そういうときは作業は。

吉野 ぼくが中心になってやったわけです。

田中 これは西ドイツへお出かけになる前ですか。

吉野 そうです。それで、その前に思い出したのは、ハート・トゥ・ハートということは福田さんも言ったのだけれども、三木さんも言ったのではないですか。初めぼくはハート・トゥ・ハートという言葉聞いたときに、非常にキザな、ちょっと困ったことだなと思っていたのを覚えています。福田さんも確かに言っていました。ハート・トゥ・ハートともしっかりと大きく言ったんです。

田中 このときは東南アジアへ行って、日本の協力姿勢を示す、あるいは74年に田中さんが行ったときに変なことをされたということを挽回するということがあったと思うんです。外務省のなかの作業として見ると、こういうのはどんなかたちで行われたんですか。

吉野 これも外務省としては結局、援助の問題ですから、大蔵省、通産省、経企庁、それに農林省も入れて、最初は外務省の内部でまず各局を説得したりします。これはもとは経済協力局から出てきたわけです。経済協力局は日本の援助を積極的に増やし、日本をもっとインボルブさせて行こうということですから、当然ですが、アジア局とか他の局の連中はそんなに賛成したわけではありません。それは一つはお株を取られるということもある。二つはアジアに対する見方がまだ焦点が定まっていなかった。殊にアジア局あたりは中国のほうが大事だとか、北鮮のほうが危ないとかたちですから、いわゆる協力によって……。だからインドネシアとか、タイとか、マレーシアというのはまだアジア局の一番大事なところではなかったわけです。今はタイ大使とかマレーシア大使というのは重要なポストですが、だから、外務省のなかでも相当問題だったんです。

それを更に、大蔵省、通産省をまきこんで行こう……。通産省は根本的には賛成でしょうけれども、外務省にイニシアティブを取られないようにやっていきたい。大蔵省は金を使うのはいやだという。というようにそれぞれ反対した……。説得はそれほど困難ではなかったです。1億ドルの共通基金とか何とかとかいうかたちでごまかしておけない、実際にはなかなかよいプロジェクトは出てこないから、お手並み拝見だというような気持ちが、大蔵省にはあったわけです。それで結局、そういうふうになったわけですが。

田中 あとちょっとあれなんです、三木さんも福田さんもそうですけれども、そのあたりだと、総理と外務省との関係で言うと、外務省から行っている秘書官の方は人によっていろいろ役割は違うんですか。

吉野 そうです。人によって違いますね。菊地君は大平さんの秘書をやっていたが、そのころはまだ総理秘書官はそれほど大きな役割を果たしていなかったようです。菊地君ぐらいから相当活発になってきたようです。その前までは外務省から出た人達は、ただ官邸と本省との連絡を取るというのが専らの仕事のようにした。

田中 福田さんのときは、小和田さんが。

吉野 そうそう、小和田君あたりで、相当外務省的な見解を福田さんにも注入したようです。だから外務省も助かった。木内君は田中さんの秘書官だった。

(録

音終了)